

## 80歳以上の結核標準治療の検討

結核療法研究協議会内科会

**要旨：**〔目的〕結核の標準治療は現在、ピラジナミド（PZA）を含む（A）法と含まない（B）法があり、80歳以上の高齢者においては（B）法をより積極的に推奨しているが、その妥当性を検討する。〔方法〕レトロスペクティブな既存データのみを用いた多施設共同研究である。参加施設は、結核療法研究協議会（療研）内科会参加施設および、結核病学会治療委員の協力依頼を受けた結核病床を有する医療施設である。2012年参加施設の80歳以上の結核患者のうち、標準治療（A）法（以下A群）または（B）法（以下B群）で治療した症例の背景情報、治療成績、有害事象の発現状況、その後の再発割合を収集した。〔結果〕A群・B群で男女差、年齢、治療歴、塗抹結果、治療開始時培養陽性率、画像所見、身体活動度で違いはなく、合併疾患として肝障害、腎障害、悪性腫瘍の頻度はA群で少なかった。病院ごとのPZAを含む治療開始の割合は違いが大きかった。有害事象の発生頻度は肝障害（重篤な肝障害も）および視神経障害がA群で多く、治療変更例も多かった。治癒・治療完了割合はA群で高かった。死亡割合に差はなかった。〔結論〕80歳以上の高齢者においてもPZAを含んだ結核標準治療は有用であるが、重篤な肝障害の危険は若年者より高い可能性があり注意が必要と考えられた。

**キーワード：**結核、高齢者、治療成績